

『祖堂集』における程度副詞について

A Study on Adverbs in 『Zu tang ji』

竹田 治美
Harumi Takeda

1 『祖堂集』について

『祖堂集』二十巻は現存する南宗禅燈史最古の完本で、五代南唐の静・筠の二人の禅僧によって南唐保大10年（952年）に編集された。『祖堂集』は中国国内で編集されたものの、入蔵されず、高麗に伝わり、高麗の高宗32年（1245年）に大蔵經の蔵外補版として開版された。

『祖堂集』は唐宋五代という中古漢語から近代漢語へと推移する時期の音韻、語法、語彙の特徴を探求すべき資料である。『祖堂集』には白話体と文言体が用いられ、俗語・雅言や方言、官話なども多く記録されている。『祖堂集』は晩唐・五代口語の第一次資料として当時の言語状況を反映する貴重な禅宗史書であり、当時の禅思想を明らかにすることができる。

本論は、『祖堂集』における程度副詞に焦点を合わせ分析したものである。なお、テキストとして中華書局點校本が校勘・標点が最も行き届いているのでこれを用い、禅文化研究所影印大韓民国海印寺蔵版『祖堂集』を参照することにする。

2 古代漢語の副詞について

太田辰夫の『中国語歴史文法』（1958）は、「副詞は動詞・形容詞を修飾するものであるから、これを、動詞のみを修飾するもの、形容詞のみを修飾するもの、動詞と形容詞を修飾するものの三種類に分けることが考えられる。しかし、ある副詞がどのような語を修飾するかということは、その間に意味上の関係を生ずるか否かということにあり、たとえば動詞のみ修飾するといっても、それが動詞のすべてを例外なく修飾するとはかぎらない。そこで、しばらく意味的に細分しておくが、分類はいずれにしろ便宜的なものにすぎない。また、副詞そのものが古今を通じて、ほとんど語彙的な変化しかみとめられず、句の構造に影響を及ぼした点は少ない」と述べている。⁽¹⁾

その上で太田辰夫は副詞を接尾辞、程度副詞、時間副詞、範囲副詞、情態副詞、否定副詞、疑問・感嘆・反詰副詞、指示副詞の8種類に分類している。

王力の『中国古文法』（1982）は、副詞は限制詞の一種であるとし、副詞を性態副詞、時間副詞、地位副詞、判断副詞、否定副詞、程度副詞、数目副詞、単互副詞、関係副詞、詰問副詞の10種類に分類している。⁽²⁾

副詞は漢語語彙史からみて時代とともに変化した。副詞は複雑な品詞であり、数が多く、多様であることが大きな性質である。副詞の分類は、意味や性質、状態、特徴に基づいて分類方法が大きく異なり、学説も多岐にわたっている。

2.1 中古の副詞の特徴について

上古（商～漢）においては、副詞は単音節のものが圧倒的な優位を占めていた。中古（魏～南北朝）に移ると、仏典や説話集などの通俗作品に口語表現が用いられ、副詞がさらに広く使用されるようになった。中古の副詞の特徴をまとめてみると次のようになる。①単音節副詞が主流を成した。②しかも、副詞の機能のみを単独で担うものより、複数の詞性をもつ多義語としての役割を果たしたものが大半を占めた。以下は今まで考察の対象としてきた干寶の『搜神記』（汪紹楹校注 中華書局出版）の例を用いて説明する。

例えば「極」を挙げると以下のように複数の詞性を持っている。

- (1) 堅曰：「日月者，陰陽之精，極貴之象。吾子孫其興？」(122-4)

「極」は程度副詞であり、非常にという意味である。

- (2) 綏山多桃，在峨眉山西南，高無極也。(4-1)

「極」は名詞であり、極限の意味である。

- (3) 初在廣漢，夢坐大殿，極上有禾三穗，茂取之，得其中穗，輒復失之。(122-6)

「極」は名詞であり、家屋の屋梁の意味である。

- (4) 江夏功曹張騁所乘牛忽言曰：「天下方亂，吾甚極焉」。(101-1)

「極」は動詞であり、疲れはてるという意味である。

- (5) 篡盜短祚，極于三六，當有飛龍之秀，興復祖宗。(84-3)

「極」は動詞であり、至、すなわち最高限度になるという意味である。

- (6) 鯢即極力而牽之，其臂遂脫，乃還去。(225-3)

「極」は動詞であり、用い尽くすという意味である。

- (7) 凡山徙，皆不極之異也。(67-8)

「極」は形容詞であり、適切で正常という意味。

- (8) 極夜不還。(198-7)

「極」は名詞であり、一晩という意味である。

現代語では、「極」は頂点(名)、極地(名)、尽くす(動)、最終的(形)、最高の程度を示す副詞の語義が残っており、二字単語で用いられるのが一般的であり、一字で用いられる場合は主に副詞となる。

また、中古の副詞は同時に次元の異なる程度を示す「稍」や、他の副詞の機能を持っている語も多く存在する。

中古の複音節副詞はどのような特徴をもっているだろうか。

中古の複音節副詞の特徴は、単音節から変化した重複構造(重文)が一般的なものである。例えば「時時」、「漸漸」、「屢屢」などのような形で現れ、意味と機能は元の単音節と同じであるが、一語一義になる。重複することによって口語的意味の明白化をもたらしたと考えられる。

また、接頭辞・接尾辞を用いた副詞の複音節化も多い。中古には接頭辞・接尾辞が大量に登場し、語彙の複音化に寄与した。例えば、中古に最も使用された「復」は、「副詞+復」「復+副詞」の形で複音節語を作る接辞的な機能をもった。「復」の複音化の例としては次のような語がある。「不復」、「當復」、「皆復」、「果復」、「又復」、「卒復」、「若復」、「忽復」などこれらの語義は「～復」をとみなわない一字の場合と変わらないが、ともなうことによって語彙の安定化をもたらした。

3 『祖堂集』の程度副詞について

以下、『祖堂集』の特徴的な例によって、程度副詞の使用状況と性質を分析する。

周知のように現代漢語の副詞は、主に形容詞を修飾することが一般的であり、動詞を修飾するさい、多くの制限があるのが特徴である。また、助動詞や心理的な活動を示す動詞など特定の動詞構造形式しか修飾できない。

ここで取り上げる程度副詞とは、主に形容詞述語・動詞の前に置かれて、動作・行為・状態が達する程度を示すものである。

便宜上、程度副詞の性質を基準にして大きく4つに分類する。①高い程度を示すもの。②低い程度を示すもの。③頻繁の程度を示すもの。④比較の程度を示すもの、である。

3.1 高い程度を示すもの。

この種の副詞を更に分類すると2種類に分けることができる。ここでは仮に「極度副詞」および「高度副詞」と称する。

「極度副詞」は主に形容詞述語を修飾する。動詞あるいは述語動詞を修飾することがない。「極」(10例)、「最」(26例)、「至」(4例)がこれにあたる。これらの副詞は前代から継承してきたものである。

ここでは、「極」の例を取り上げて、前節と比較してみたい。

- (9) 人壽極久，不可量計。(卷1, 釋迦牟尼章8-3)
- (10) 自四十餘年，大化漢國，其道行孤峻，一方賢儒敬重極矣。(726-14 韓)
- (11) 適來薛和尚僧去涅槃堂裏，兩人對坐遷化，極是異也。(卷10, 洞山章299-8)
- (12) 師云：「雨順風調，極有所濟。」(卷12, 報慈章590-13)
- (13) 師云：「以何為極則？」封云：「法身為極則。」(卷16, 南泉717-2)

『祖堂集』の「極」は18例のうち10例が副詞として用いられ、主に形容詞と動詞、動賓構造を修飾し、状語と補語になる。『祖堂集』に現れた「極(最)是」、は、副詞が判断詞「是」を修飾あるいは連用して、「是」は接尾詞の機能を持っていると考える。

また、「極其」は『祖堂集』には表れないが、同時代の資料『敦煌變文集』には若干の使用例(2例)が見られる。宋代の資料においては使用例が多くみられ、発達してさらに口語化した。

「至」は全部で230例があるが、うち4例のみが副詞として用いられる。「至」は一字の副詞の機能から動詞や名詞に前置して複音節を形成する性質が定着したと考えられる。

「高度副詞」は述語の前に置かれ状語になる。「大」(11例)、「太(太…生)」(38例)、「太(大)煞(殺)」(5例)、「多」(4例)、「非常」(4例)、「殊」(5例)「殊常」(2例)、「異常」(3例)、「頗」(3例)、「甚」(42例)、「頗甚」(1例)、「甚大」(2例)「甚是」(2例)「欲」(1例)、「深」(25例)、「深自」(4例)「可殺」(5例)、「可笑」(2例)「可謂」(2例)がこれにあたる。

- (14) 「太」 讓和尚曰：「子問太高生，向後人成闡提去。」(卷4, 石頭章, 197-12)
- (15) 「大煞」 你大煞聰明。(卷4, 藥山233-1)
- (16) 「太殺」 西堂作忍痛声云：「太殺搜人鼻孔，直得脱去。」(卷14, 石鞏章, 631-7)

- (17) 「非常」 真塔浩瀚非常，北有汾州，南有塩官矣。(巻15, 塩官章, 668-9)
- (18) 「殊常」 妣朴氏，胎孕之際，夢得殊常，以貞元三年五月五日出生。(巻17, 東國慧日章, 752-2)
- (19) 「可殺」 困山云：「今日可殺寒。」(巻11, 保福章, 504-2)
- (20) 「可笑」 因此洞山息疑情，乃作偈曰：「可笑奇！可笑奇！無情解說不思議。」(巻5, 雲岩章251-2)
- (21) 「可謂」 師喝噴云：「可謂好樓閣，若不遇老僧，泊入火客屋裏造猪。」(巻16, 南泉章716-12)
- (22) 「頗甚」 白舍人為江州刺史，頗甚段敬。(巻15, 歸宗章683-3)
- (23) 「甚大」 師曰：「聞說長安甚大鬧，汝還知也無？」(巻4, 葉山章235-4)
- (24) 「甚是」 黃蘗云：「道薄人微，甚是難消。」(巻11, 睡龍章533-5)
- (25) 「深自」 王見此事，深自歎語。(巻2, 婆修磐頭章72-1)
- (26) 「欲」 德山諦視，久而自曰：者阿師欲似一个行脚人。(巻7, 巖頭章335-3)

(14) 太田辰夫(1988)は「太」の句末に「生」を併用することが多い。古代語にも用例があるが『祖堂集』では特に多く用いられる」という。⁽³⁾

「太」主に形容詞の前に置かれ、形容詞短句になる。「生」は動詞で現代語の「太…了」「太…過了」と同じく口調を強める機能を持っている。この用法は唐詩と宋詞にもよく見られる。

(15)～(16)「煞(殺)」は自体が形容詞と連詞の機能を持ちながら、副詞として動詞や形容詞の後ろに置かれ、補語になる。状態、行為の程度が極度になる。

(19)～(21)は「可殺」、「可笑」、「可謂」は副詞として用いられる場合は口語表現が多い。

しかし、私が近古副詞の考察対象とした『朱子語類』には副詞としての用例が見られない。文体にかかわるかどうかが詳細の調査が必要である。

(25)「～自」は接尾詞である。副詞の接尾辞については太田辰夫、王力が早くに見解を示した。

「自」は中古から発達し、「自」を伴う副詞が大幅に増加した。また、形容詞、助動詞の接尾辞で用いられることも多い。主に「儘自」、「稍自」、「更自」、「都自」、「親自」、「各自」などがある。近古の「自」は前代と同様に完全虚詞化しておらず、「親自」、「各自」のような実質的な意味を有するものもある。

3.2 低い程度を示すもの

この種の副詞は主に形容詞と動詞の前に置かれて、各々の状態、程度、質量の低度を示す。ここでは仮に「弱度副詞」と称する。「小」(2例)、「略」(10例)、「稍」(2例)、「少」(2例)、「少少」(1例)、がこれにあたる。低い程度を示す副詞は実詞の機能が依然として残り、副詞としての使用頻度が低いのが分かる。「少少」のみが副詞として用いられる。

- (27) 「少少」 有人問：「二祖截臂，當為何事？」師云：「不為少少苦。」(巻8, 雲居章369-1)

3.3 頻繁の程度を示すもの

この種の副詞は動作、状態、行為などが頻繁に行われることを示す。文中で主に動詞と動詞述語を修飾する。ここでは仮に「頻度副詞」と称する。「常」(39)、「頻」(5例)、「頻頻」(2例)、「往往」(1例)、「每」(16例)、「每常」(1例)、「時時」(5例)、がある。

「常」、「頻」、「往往」、「毎」、「每常」、「時時」、は上古、中古から常用されている副詞である。「頻頻」は近古に現れたと思われる。

- (28)「往往」 昔日時時逢_レ剎客，今朝_レ往往_レ遇_レ癡兒。(巻5, 華亭章260・1)
- (29)「時時」 時時_レ惣_レ佛拭，莫使有_レ塵埃。(巻2, 弘忍章118・4)
- (30)「每常」 融_レ警聞此語，乃曰：「融_レ每常望_レ隻峯山頂礼，恨未得_レ親往_レ面謁。」(巻3, 牛頭章136・2)
- (31)「頻頻」 有一禪師唯善塞_レ竈，頻頻_レ感得_レ竈神現身。(巻3, 破竈墮章155・2)

これらの副詞は前代から継承されたものであり、宋代にも常用されていて、用法が定着された。

3. 4 比較の程度を示すものである。

この種の副詞は主に動作・行為などがある状態から他の状態に変化したことを示す。形容詞と動詞の前に用いられて、述語を修飾する。ここでは仮に「比較度副詞」と称する。「弥」(1例)、「更」(19例)、「倍加」(1例)、「益」(3例)、「漸」(8例)、「漸漸」(2例)「轉」(8例)、「轉更」(2例)、「轉轉」(1例)がこれにあたる。

- (32)「弥」 迦那提婆，德岸_レ弥高。(巻1, 祖迦那提婆章57・7)
- (33)「倍加」 夜則山野頭_レ陀，書則_レ倍加_レ執役。(巻17, 福州西院章744・7)
- (34)「漸漸」 忽然有一僧來請他為院主，_レ漸漸_レ近有_レ四五十人。(巻4, 葉山章224・2)
- (35)「轉」 在_レ匡謂言無_レ照耀，用來方_レ覺_レ轉_レ光輝。(巻9, 落浦章413・2)
- (36)「轉更」 直下猶難_レ會，尋言_レ轉更_レ除。(巻10, 鼓山章483・3)
- (37)「轉轉」 所在_レ迢_レ俠，就_レ後山上起_レ小屋，請和尚去_レ上頭安_レ下。和尚上頭又_レ轉轉_レ師僧王(住)。(巻4, 葉山章224・2)

「比較度副詞」は一般的に前節あるいは文中において、比較対象が明示する場合としなくてもよい場合があり、文の前後に制約される場合が多い。

「弥」は先秦時代から副詞として使用され、六朝時代になると副詞の機能が衰退しつつ、宋代になると程度副詞としての例文は殆ど見られない。

「加」は中古から接尾辞の機能がもたされた。「加」自体も副詞としての機能をもっていて、主に程度副詞に後置し、さらに程度の変化を強調する。例えば、「更加」、「益加」、「愈加」のような形で用いられ、「加」は実質的な意味を有している。「加」のような実詞の機能をもっている接尾辞が殆どない。

「轉」、「轉更」、「轉轉」は「ますます、いよいよ」の意味で用いられる。同時代資料にも用例が多数みられる。「轉」は宋代の資料に副詞としてしばしば現れるが「轉更」、「轉轉」は見られない。

4 まとめと今後の課題

以上、『祖堂集』における程度副詞が近古(唐五代～明)前期においてどのように用いられているかを確認しながら、中古の程度副詞と比較して分析した。全般的な傾向として、『祖堂集』における程度副詞は前代から引き継ぎ用いられるものが多く、単音節副詞は他の品詞の機能を持ちながら副詞として存在し、重複複音節(疊語)程度副詞も依然として使用されている。

中古の程度副詞と比較すると、実質的語義または複雑な品詞機能から離れつつ、副詞として独立するものが数多

くなってきた。また、複句、複文の中で柔軟な用法も多数見られる。

一方、中古に使用頻度が低かった「恒」、「厚」、「政」、「雅」、「孔」、「稀」、「彌」、「屬」、「比屢」、など一部の程度副詞は、副詞としての機能が既に衰退した。

副詞全般をみると中古に最も使用された「復」は、「副詞+復」、「復+副詞」の形で複音節語を作る接辞的な機能の用例が少ないため、衰退しつつあると思われる。

語法的中古と比べると、修飾する範囲が広くなり、動詞、形容詞のほかに、名詞性述語、動詞構造、形容詞構造、名詞構造、代詞を修飾することができるようになった。また、一部の程度副詞は述語の後ろに置かれ、状語後置になり、さらに口調を強調する効果をもつ。この用法は現代語においても口語表現の特徴である。また、副詞が主述構造を修飾する特殊な使用例もしばしば見える。すなわち近古では副詞の用法や機能が柔軟になったといえよう。

『祖堂集』の程度副詞には新しい語彙の誕生が見られなかったが、他の種類には、例えば「落後」のような時間副詞として『祖堂集』に最初に現れるものである。

さて、『祖堂集』の副詞に目を向けてみると、約250種類の副詞があり、うち単音節のものは約110種類あり、全体の44.％となっている。一方の複音節副詞は140種類あり、徐々に主流をなす傾向にある。この現象について、楊榮祥『近代漢語副詞研究』（2004）は、近古の4つの資料を取り上げ、全体の副詞に占める単音節副詞の割合を調査している。それによれば、唐五代の資料『敦煌變文集』の単音節副詞の使用率は48.2％、宋代の資料『朱子語類』は47.1％、元代の資料『新編五代史平話』は65.3％、明代の資料『金瓶梅詞話』は42.8％であるという。つまり、近古において単音節の比率は殆どの場合半分に満たないという結果である。私が調査した宋学語録（副詞436種類、うち単音節副詞192種類）の単音節副詞の使用状況もこの結果とはほぼ一致する。すなわち、唐五代には単音節副詞は傍流的な存在になる過渡期であったことが分かる。

このように単音節副詞は中古に比べると、減少する傾向の中にあるが、残存した単音節副詞の語義や用法、機能は依然として複雑である。

『祖堂集』における単音節副詞の特徴をまとめてみると、次のようになる。①前代から継承したものが多い。②一語多義、一語多機能のものが多い。③使用頻度が高い。④修飾する成分の範囲が狭いという特徴である。

複音節の副詞の特徴は、①近古に現れたものが多い。②一語一義、単純副詞が多い。③修飾する成分の範囲が広い。

今回行った作業は、『祖堂集』における副詞の特徴を探るための第一歩に過ぎず、全体像を俯瞰した上で改めて論じたい。

〈付記〉本稿は、日本中国学会第65回大会における口頭発表をもとに加筆・修正したものである。

『祖堂集』における程度副詞の一覧表

| 類別 | 種 | | 類 |
|------|-----|-----------------------|--|
| 程度副詞 | | 単音節 | 複音節 |
| | 極度 | 極、最、至 | 極是、最甚 |
| | 高度 | 大、太、(太…生)多、殊、頗、甚、欲、深、 | 不妨、太似、太(大)煞(殺)非常、殊常、異常、深自、可殺、可笑、可謂、頗甚、甚大、甚是、 |
| | 低度 | 小、略、稍、少、 | 少少 |
| | 頻度 | 常、頻、毎、時時 | 頻頻、往往、每常 |
| | 比較度 | 弥、更、漸、 | 倍加、漸漸、轉更、轉轉 |

注

- (1) 太田辰夫 (1958) 『中国語歴史文法』 p.268 江南書院
- (2) 王力 (1958) 『漢語史稿』 p.26 中華書局 1986版
- (3) 太田辰夫 (1988) 『中国語史通考』 p.188 白帝社

主要参考資料

- 太田辰夫 (1957) 『中国歴代口語文』 朋友書店
- 香坂順一 (1967) 「近世・近代漢語の語法と語彙」 『中国文化叢書 (1) 言語』 大修館書店
- 志村良治 (1967) 「中古漢語の語法と語彙」 『中国文化叢書 (1) 言語』 大修館書店
- 志村良治 (1983) 『中国中世語法史研究』 中華書局
- 衣川賢次 (2012) 「祖堂集語法研究瑣談」 花園大学文学部研究紀要 44
- 衣川賢次 (2010) 『祖堂集』 異文別字校證 東洋文化研究所紀要 157
- 衣川賢次 (2013) 『祖堂集』 の基礎方言 東洋文化研究所紀要 164
- 楊榮祥 (2004) 『近代漢語副詞的發展』 商務印書館
- 竹田治美 (2012) 『宋代語録における副詞研究』 白帝社